

想い | つくる | 伝える

新潟市

[F u u d]
2019
春号
—季刊—

2019 Eye's
新潟ここだけ物語

がんばろう ● ニッポン!

Take Free
ご自由にお持ちください

角田山が見守る、彩りと賑わい

[新潟市西蒲区] 文 / 本望典子

にいがたの水辺 vol.1



県名にも由来するように、新潟は豊かな水に恵まれた地である。川、湖、池、滝、港…その水はいかに人々の生活や文化、歴史、産業と結びついてきたのだろうか。そんな水辺の魅力を探るべく、まずは「上堰潟」に足を運んだ。

水際の菜の花がつぼみをつけている。桜の開花も待ち遠しい。優しい光が水面にきらきらと映ってより一層春の訪れを感じさせる。潟の一周は約2km。ちょっとした散策にはうってつけの距離だろう。雄大な角田山を背景にした美しい景観と鳥の鳴き声に癒される時間は、さながら「潟セラピー」のように感じた。

ここに来たのは約15年ぶりだった。娘が保育園の頃の親子遠足で「上堰潟公園」を訪れたときは、遊具や緑地がメインで潟を含む自然の彩りを楽しむゆとりがなかったように思い返す。今回印象的だったのは、



周辺散策コースに加えて潟の中を横断できる「木道」。家族連れやシニア層の団体など、多くの人々が行き交っていた。私がカメラを構えていると、「ここからの景色は午前中がいいよ」「あの遠くに見える三角は、多宝山ね」と女性グループが笑顔で声をかけてくれた。こんなふれあいが何ともうれしい水際効果である。

昔は農業のかんがい用水源・降雨時の調整池として利用されていた上堰潟。木の香りが漂う休憩所には、昭和25年頃の泥上げ風景として「舟田」と呼ばれる農作業用の舟に乗る姿がセピア色の写真で掲載されていた。数々の事業、計画の末、現在この水は西山川～広通川～新川を通じて排水され、海と直接つながる潟になったという。

調べてみると「舟田」は、農作業だけでなく、移動用にも、子ども達の潟での遊び用にも使われていたそうだ。現在も「上堰潟舟田の会」として、地元の小学生を対象に乗船する機会を設けているということ。大人も乗れるチャンスがあればぜひ私も体験してみたい。そして、潟をより身近に感じてみたいと思う。

上堰潟(うわせきがた)

住所: 新潟市西蒲区松野尾1番地

概要: 米作りのための干拓計画の鴨だったが、1967(昭和42)年に中止となった。その後、土地改良事業をする中で潟だった土地が陸化した。1993年(平成5)からの復元事業により、1998年(平成10)度に上堰潟公園が開園。現在は、多くの人々で賑わう公園として活用されていると同時に農業用排水の処理などに活かされている。

ふうど 2019春号 vol.44

企画編集 ふうど編集室
発行人 高橋 佑
取材編集 渋川綾子
佐々木聰
写 真 渡部佳則
デザイン 斎藤道司
題 字 小林 翠

編集後記

ジャズは敷居が高いと思っていた。取材当初は、恐る恐る新潟のジャズ界に足を踏み入れたが、会う人会う人、みなさん気さくで、ジャズに対する熱い想いを静かに語ってくれた。演奏の腕を磨く真摯な姿とも出会えた。日本人の感性とは全く異質なジャズが、実は普遍的な価値をもつ芸術であり、その芸術に親しみ、また芸術性を追求する演奏者が、ごく身近に大勢いることを知り、新潟の音楽文化の裾野の広がりと層の厚さを再認識させられた。それら日常に埋もれている情熱が、街なかに噴出するのが新潟ジャズストリートだった。その仕掛けも運営も市民が主体的に行っていたことに、正直驚いた。江戸時代、北前船の寄港地として賑わった新潟は町人が支えてきた町。その精神的風土がいまも確実に生きているように思えた。新潟市名誉市民であるジャズ界の巨匠デューク・エリントンの博愛心もあわせ、新潟ジャズストリートは、これからも市民が守り育てるべき、新潟の文化遺産だったのである。(渋川)

発行所

ふうど編集室
まるごと印刷の
株式会社タカヨシ

■本社・工場 / 〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800
■東京支社 / 〒113-0034 東京都文京区湯島3丁目24-11 湯島北東ビル2階 TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884
■仙台営業所 / 〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5丁目347上杉オオカミビル501号室 TEL (022) 266-1711 FAX (022) 266-1712
■名古屋営業所 / 〒465-0093 愛知県名古屋市名東区一社1丁目79 第六名昭ビル6A TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081
■オフィシャルサイト / <http://www.takayoshi.co.jp>

「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】→中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、駅前オフィスNIIGATA、NSG学びステーション、NST、NPO法人 Made in 越後、上古町商店街、旧小瀬家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店など工房、朱鷺メッセ、新潟NPO協会、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県記念館、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟国際情報大学、新潟中央キャンパス、新潟市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ビアBandai、ホテルルイアーハ、ホテル日航新潟、リューフ島潟、新潟空港、<江南区>介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田図書館、<西蒲区>新潟ふるさと村、新潟大学附属図書館、佐潟荘、<南区>新潟市農業活性化研究センター、<北区>新潟せんべい王国、ピューフ島潟、新潟空港、<江南区>介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田図書館、<西蒲区>カープドーム、ドーム・シティ、<秋葉区>カフュギャラリーやまぼうし、川内自動車、新津鉄道資料館【新潟市】加治川地区公民館、紫雲寺地区公民館、新發田市生涯学習センター、新發田市民文化会館、新發田市立圖書館、豊浦地区公民館【聖籠町】聖籠福音の湯 ざぶーん【村上市】イヨボヤ会館、村上市観光協会【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡大学、長岡市立中央図書館、長岡西病院、やまとし復興交流館おたらる【燕市】分水ビターサービスセンター【出雲崎町】越後出雲崎天領の里【湯沢町】雪国觀光舎 越後湯澤温泉【南魚沼市】桜苑【佐渡市】SADO伝統文化と環境推進の専門学校、ホテル大佐蔭【東京都】→渋谷区>表参道・新潟館ネスバース【中央区】ブリッジにいがた→千代田区>新潟市東京事務所【東京都】→渋谷区>表参道・新潟館ネスバース【中央区】ブリッジにいがた→千代田区>新潟市東京事務所本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレス
バイインダー

この印刷物は環境にやさしい
製本方法を採用し、
リサイクルや怪我の危険へ
配慮しています。



身近にあるものは、つい見過ごしてしまった。

ことしで十七年めを迎えた新潟ジャズストリートも、そう。新潟市中央区に点在する二十カ所以上の会場で、

会場で選んでも、好きなバンドの追いかけても、楽しみ方は人それぞれ。

こんな気軽で華やかなイベントだが、その奥には、ジャズ界の巨匠デューク・エリントンとの想い出や、

進駐軍時代の街の記憶など、たくさんの物語が隠れていた。

アメリカ力が来た頃

想い	港町の文化遺産
----	---------

本場ジャズの種子

独特のリズムで心をゆさぶるジャズ。日本人には異質な音楽が、どうして日本海側の地方都市新潟にもたらされたのか。この素朴な疑問を解く鍵は、太平洋戦争後に日本が連合国統治下に置かれた歴史にあった。

一九四五年(昭和二十)九月、新潟市にも千五百人近くのアメリカ軍が来港。新潟市公会堂に司令部をおき、市内の主要な建物は司令官や兵士の宿舎になり、わずか一ヶ月前まで敵だと思っていた兵士と異国の文化が街中を席巻していった。なかで

シャンは引く手数多でした。

そのうちに地元だけでは賄いきれないほど演奏需要がふえ、東京からミュージシャンが来るようになります。それは単に需要があるというだけでなく、ジャズの芸術性に魅力を感じていた多くのミュージシャンがジャズをやる場所を求めていたからです。ご存知のようにクラブはお酒を飲みお店の女性と会話やダンスを楽しむ場で、スローテンポのムーディな曲が好まれました。ジャズはお客様の縛りも緩やかでジャズを演奏できる環境がまだ残っていました。ジャズをやるなら新潟」という話がミュージシャンの間で広まり、優れたジャズマンたちがどんどん新潟入りしてくるのです。多い年で二百人ほどもいました。

ジャズ評論家の野坂恒如さんの評論集に、「『ジャズ都市新潟』の名は、今なお在京のジャズメンの常識になりました。野坂氏はジャズ愛好家とミュージシャンを結びつけるコンサート開催や、地元と東京のジャズマンがセッション

も新潟空港は、一九五〇年(昭和十五)から米空軍のキャンプとして接収され、アメリカの小さな町のようになる。その一画に立つバーやクラブでは米軍に雇われた新潟のミュージシャンが、毎晩のようにアメリカのジャズやポップスナンバーを演奏した。この専属バンドのメンバーになつた多くのミュージシャンが、新潟の街のなかに本格的なジャズの種を撒いた。

そのひとりが中村炳吉さん。キャンプでベース奏者として演奏し、三年後に自らが率いるコンボを結成し、『ジャズ都市新潟』と言われた黃金期を駆け抜けた人である。取材当日、中村さんは上質な紺のビードのジャケットで大柄な身を包み、颯爽としていた。その佇まいにミュージシャンの矜持と芸能プロモーションのクラブでベース奏者として演奏し、上官はウエスタンやカントリーなど。

新潟ジャズが全盛期を迎えた、一九六四年(昭和三十九)の六月十六日。新潟市はマグニチュード七・五の地震に襲われた。たまたま、その三日後にジャズの世界的音楽家デューカーのセオフィラス・アシュフォード・エリントンが初来日し東京でコンサートを行った。その時、ジャズが好んでいた当時の新潟アメリカ文化センターの田中トシユキさんは、「ジャズピアニストの田中トシユキさんは、『ジャズビニアニストだわらず、さまざまな音楽を取り入れて独自の音楽性を追求したエリントンと、いろんなジャンルの音楽が演奏される新潟ジャズストリートの組み合わせは音楽的にみても、とてもいい組み合わせだと思います。その音楽に対する柔軟な考え方市民に共感され、十七年も続いてきたのでしょ」とプロの視点で解説してくれた。

この時の約束を守り、一九七〇年(昭和四十五)一月十九日、大雪に見舞われた新潟駅にエリントンとその楽団一行が降り立つたのである。ホテルでの歓迎パーティのあと、新潟県民会館でエリントンとそのオーケストラによるコンサートが開かれた。ジャズ界の巨匠エリントンが地方都市で公演をするなど希なことで、日本のジャズ史にも刻まれる歴史的な出来事だった。

このエリントンの大好きな善意を次代に伝えるために、新潟ジャズストリートはイベントを『デューク・エリントン』と名づけた。このエリントンの大きな善意を次代に伝えるために、新潟ジャズストリートはイベントを『デューク・エリントン』と名づけた。

新潟ジャズが全盛期を迎えた頃、ジャズファンのために開催されたコンサートの初期のパンフレット。これらのコンサートの開催に向けジャズ評論家の野坂恒如氏が尽力。(昭和37年~38年)(中村炳吉氏所蔵)



キャンプのクラブで演奏を楽しむアメリカ兵。
(昭和33年)(中村炳吉氏所蔵)



古町のクラブで演奏する中村炳吉とミッドナイトonz。
(昭和34年頃)(中村炳吉氏所蔵)



デューク・エリントンオーケストラの新潟公演の時、渡辺浩太郎市長から歓迎メッセージを受け取るエリントン。(昭和45年1月19日)(新潟市所蔵)



エリントンとその楽団を乗せてきた「特急とき」。
(昭和45年1月19日)(新潟市所蔵)



歓迎パーティでピアノを弾くエリントン。
(昭和45年1月19日)(新潟市所蔵)

空港の返還後、昭和の好景気とともに高級クラブや大型のキャバレーなどが続々と開店し新潟は日本海側屈指の歓楽商業都市になる。「いいバンドを専属で抱えることが店のステータスでしたから、腕のいいミュージ

ができたのです。これには兵士たちも大喜びで、わたしもこの一年間でたくさんアメリカ音楽を吸収しました」。演奏は日曜日をのぞく毎晩。中村さんたちバンドマンは、新潟空港と古町の間を軍専用のバスで送迎されただろう。一方、古町にあつたキャバレーやダンスホールなども、空港が返還される昭和三十三年頃まで米兵で賑わっていたという。

ジャズ都市新潟

空港の返還後、昭和の好景気とともに高級クラブや大型のキャバレーなどが続々と開店し新潟は日本海側屈指の歓楽商業都市になる。「いいバンドを専属で抱えることが店のステータスでしたから、腕のいいミュージ

ができたのです。これには兵士たちも大喜びで、わたしもこの一年間でたくさんアメリカ音楽を吸収しました」。演奏は日曜日をのぞく毎晩。中村さんたちバンドマンは、新潟空港と古町の間を軍専用のバスで送迎されただろう。一方、古町にあつたキャバレーやダンスホールなども、空港が返還される昭和三十三年頃まで米兵で賑わっていたという。

中村さんたちバンドマンは、新潟空港と古町の間を軍専用のバスで送迎されただろう。一方、古町にあつたキャバレーやダンスホールなども、空港が

ジャズが街を変える

つくる 商店主たちの挑戦

街そのものがライブになる

平成最後の一月十九日。三十三回目の新潟ジャズストリートが正午にスタートした。新潟の冬にしては珍しく晴れ渡り、冷気に凍える青空はガラスのように引き締まり、見馴れた街の風景に強いコントラストをつけていた。この日は、まさに四十九年前、デューク・エリントンが初めて信濃川の河口の街に来た日。そんなことをふと思いだしながら、駆け足で会場を巡ってみた。このイベントは知っていたが、観客になるのは初めてだった。



冬バージョンの温かい光をまとう萬代橋と満月直前の月。

紺碧の空に屹立する古町中心部のビル群。この古町地区が新潟ジャズストリートの中心。



新潟西港の脇にたつ旧第四銀行住吉町支店でも演奏が行われる。

たった一日の経験だけど、新潟ジャズストリートが長く続いてきた訳を納得する。ちなみにこの日の観客は約二千六百人。出演バンドは県外組を含め約百二十組、演奏者は総勢が最初の頃から比べると、みんな格段と上手になり、年ごとに成長しています。それを観るのが楽しみで通っています」。ミュージシャンを見守るファンもいたのだ。

予定していた会場をあらかた廻る時計の針は午後八時半をさしていた。そんな時間でも、会場は人の波。たまたま隣あわせた三人連れの大学生は、全員ブラスバンド部だとう。「父が初回から、ずっと同じレストランに出演していまして、今日もそれを聴いてから、いろんな会場をまわってきました。ここで食事をしながら演奏を聴いて帰ります」と女子学生が教えてくれる。

この日は最後に、昭和感たっぷりのジャズ喫茶でバンド演奏を聴くことに決めていた。正味一時間。渾身のプレイが紡ぎだす音の荒波に、完全に溺れてしまった。出演者も、これ

が最後とばかりにノリにノッてくる。めくるめく音のシャワーが全てを圧した。いつまでも浴びていたい名演奏だった。

市民主体の運営態勢

たった一日の経験だけど、新潟ジャズストリートが長く続いてきた訳を納得する。ちなみにこの日の観客は約二千六百人。出演バンドは県外組を含め約百二十組、演奏者は総勢が最初の頃から比べると、みんな格段と上手になり、年ごとに成長しています。それを観るのが楽しみで通っています」。ミュージシャンを見守るファンもいたのだ。

法人新潟ジャズストリート実行委員会とボランティアが行っていた。経費はチケット売上とパンフレットの広告収入だけで賄っている。完全に市民が発案し市民が運営する手づくりイベントだった。

実行委員会代表の和田孝夫さんは、ジャズストリートを始めるきっかけなど伺う。和田さんは市内で最も歴史のあるジャズ喫茶の店主。本業の傍ら事務局の仕事を担う。「新潟ジャズストリートを始める二〇〇三年(平成十五)頃は、景気が低迷しジャズ喫茶にくる人が減り、それで四～五軒あったジャズ喫茶が少しずつ閉店していました。そんな状況を打開し街を活性化できないかと思い、東京のジャズバーを参考にし飲食店などで気軽にジャズを聴きながら食事を楽しめるイベントを企画しました。古町地区のレストランや喫茶店に声をかけ、賛同してくれた十軒のお店でスタートしたのですが、お店からお客さんが来てくれるようになつたから、もっとやれ！もっとやれ！」と言われましてね。回を重ねるごとに賛同してくれるお店やホテルが増え、新潟市と共催になり音楽施設を使えるようになりました。今年は二十七会場です。出演者も当初は六十人、観客も約七百人。それが現在のように盛大になり、ジャズストリートをきっかけに古町地区に新しいお客様が来るようになりました。一軒一軒のお店の力は小さくても、まとめてやれば大きな力になることを実感しています。他県では大がかりなライヴイベントもありますが、こちらは街の活性化が目的ですから、自分たちでやれる範囲で無理をせずにやっています」。

それにしても大きな組織の後ろ立てもなく、わずかな委員会メンバーで、これだけ大規模なイベントを運営するのは、ご苦労も多いだろうに。「とにかくジャズが好きですから」と和田さんはさらりと答える。

それほどまでに人を惹きつけ、人を動かすジャズって何なのか。



女性ヴォーカルの愛の嘆きをサックスが優しく慰め、ベースが二人のやりとりを深く包みこむ。定評あるバンドの演奏を聴こうと夜半過ぎても広い店内は超満員だった。

昭和2年に建てられた歴史的建造物のなかにあるワインレストランが、軽快なサルサの演奏でダンス会場に早変わり。

ホテルのバーで、上質なソファーに深々と身を沈めながら聴くライブは最高に贅沢。生ビールもワインもワンコインリーズナブル。バーの入口付近から眺めた萬代橋の夜景と冴え冴えとした月が美しかった。

ビッグバンドの力強い演奏に、大観衆が酔いしれる。540人収容できる新潟市民プラザホールでも立ち見の人垣ができるほど大盛況で、12年めにして初めて満席になったとバンドリーダーが笑わせていた。

古町のメインストリートにあるレストランは、食事をしながらジャズを楽しむ人で満席。道行く人も足を止めガラス越しに店内をじロジロ覗きこんでいた。普段なら決して見られない光景。手拍子を打つ人、スイングする人などステージも客席も一体になり初々しいジャズを楽しんでいた。



インフォメーション

NPO法人 新潟ジャズストリート実行委員会

事務局 〒951-8061 新潟市中央区西堀通4-819
(ジャズ喫茶スワン内) TEL 025-223-4349

読者の声 ~前号を読んで~

佐渡の八幡芋

佐渡には定型的なのがっべはありませんが、正月に帰省すると母が作ってくれる八幡芋の煮物があります。それが新潟県内の里芋の主要品種のひとつだと知り、さらに味わい深いものになりました。

(長岡市 40代女性)

正式・正調のない伝統料理

県北の「のがっべ」と「大海」は、まったく別物と言えます。「のがっべ」は正月料理で、とりわけ大晦日の晩の重要な不可欠なごちそうです。「大海」は慶事、仏事の際の重要な料理です。「のがっべ」にしろ「大海」にしろ、地域で違い、集落で違い、各家でも違います。どれが正式・正調ということではなく、それぞれ知恵をしぶり、できあがったものが、本物であり、正式・正調だと思います。

(村上市 60代男性)



半世紀以上におよぶジャズマンとジャズ愛好家の魂が染みつい

が入れ替わり、初めての人同士で様子を見ながらの演奏だ。聴いているこちら側も、緊張したり、スイングしたり、心が騒ぎっぱなしの面白い時間過ごす。それにしても仕事帰りにもかかわらず、十人近くの人が武道の他流試合ながらの真剣さで、演奏する姿に感動した。たぶん一人で練習もしているのだろう。その夜に訪ねたジャズ喫茶の他にも、定期的にセッションデーを開催する店があ

るという。新潟にはジャズ熱が、まだ地中深くに埋蔵されていたのである。同時に、観客には見えない演奏者の向上心が、新潟ジャズストリートを支えていることも知る。その一方で熱心なジャズファンの存在も見逃せない。このイベントを積極的に応援する新潟ジャズストリートサポートー倶楽部の発起人のひとり、岩間正吉さんに話を伺う。



出演者たちの長い一日が終わり、会心の笑顔をほころばせるU-BOATのメンバー。ほんとうにお疲れさまでした。

伝える	埋蔵する	ジャズ熱
-----	------	------

ジャズの沼に漬かっている

新潟ジャズストリートの大きな特徴は、出演者の多さにあるように思う。それも大半が本業をもちながら、演奏の高みを目指し、日々精進しているアマチュアミュージシャンである。その懸命な生き方が、観客の憧れともなって心を打つ。

出演バンドのひとつU-BOATのリーダー岡田正博さんに、プレイヤーとしてのジャズの魅力を伺う。「ジャズは音楽マーケットの一パーセントほどのミニアックな音楽です。でも演奏の自由度が高く、自分たちの音楽性を表現できることができです。みんなのリズムを聴き、自分がノル瞬間、全体の流れを崩さずに新しいリズムが分け入り、しかも精一杯自分のやりたいように演奏できた時の昂揚感はジャズならではでしょう。アドリブを含め全体的にバランスの取れた一曲に仕上げができるかどうか

うかで、バンドのスキルが問われます。バンドを結成して二十年ほどになりますが、いまだに沼のようにジャズにどっぷり漬かっています」。岡田さんは週一回、六人のメンバー全員で練習する。きつかり一時間、テキバキと集中して練習するのが流儀だそうだ。ジャズのなかでも硬派なものを作り、ジャズが廃れないことをしているアマチュアミュージシャンである。その懸命な生き方が、観客の憧れともなって心を打つ。

演出

仲間たち

ジャズにハマつた

うかで、バンドのスキルが問われます。バンドを結成して二十年ほどになりますが、いまだに沼のようにジャズにどっぷり漬かっています」。岡田さんは週一回、六人のメンバー全員で練習する。きつかり一時間、テキバキと集中して練習するのが流儀だそうだ。ジャズのなかでも硬派なものを作り、ジャズが廃れないことをしているアマチュアミュージシャンである。その懸命な生き方が、観客の憧れともなって心を打つ。

新潟ジャズストリートの後、もつとジャズを知りたくて「セッションデー」というジャズ喫茶のライヴに行く。いつもライヴと違い、自前の楽器を持つ人たちが続々とやってきて、小さな店内が熱気をおびる。いつたい何が始まるのか。

すると場を仕切るプロ級の人が会場にいる人を指名し、ステージに導き、その場でチームを組んだメンバーによる、まさに、その場かぎりの演奏が始まった。ヴォーカル、ピアノ、ベース、トランペッタ、ドラムと次々にメンバー

埋蔵していたプレイヤー熱

新潟ジャズストリートの後、もつとジャズを知りたくて「セッションデー」というジャズ喫茶のライヴに行く。いつもライヴと違い、自前の楽器を持つ人たちが続々とやってきて、小さな店内が熱気をおびる。いつたい何が始まるのか。

すると場を仕切るプロ級の人が会場にいる人を指名し、ステージに導き、その場でチームを組んだメンバーによる、まさに、その場かぎりの演奏が始まった。ヴォーカル、ピアノ、ベース、トランペッタ、ドラムと次々にメンバー

ジャズ調の新潟小唄

岩間さんは運命的な一曲の出会いから、ジャズにはまりファン歴五十年。毎回欠かさず新潟ジャズストリートに参加し、そのレポートを発信し続けている。ジャズを聴いていると自然に俳句が浮かぶそうで、ふたつの芸術が心によばせ即興性に言及する。新潟ジャズの歴史にも詳しい。

「新潟小唄」にジャズ調があることをご存知ですか。新潟小唄は

三代目の萬代橋が一九二九年(昭和四)に開通することを記念し、当時の新潟新聞社が北原白秋に作詞を依頼し発表されたものです。その翌年にレコード化され大変人気を呼んだようです。現在も花柳界で歌い継がれている正調(A面)と、ソプラノ歌手が歌うジャズ調(B面)が収録されました。また昭和四年には開通を祝いジャズレコード大演奏会が野外で開かれたり、新潟劇場では初のジャズ演

奏会が開かれました。ビクターレコードバンド、二村・曾我ジャズソング歌手とジャズダンサーなど、中央で活躍するメンバーが共演しました豪華なライブでした。こうして昭和初期には、すでにジャズ風の音楽が街にあふれていたと思います。その他、時代の先端を行つていたカフェの存在、文化的な教養を身につけていた豪農の存在、異文化でもすぐに吸収する港町気質など、戦後に蒔かれた本格的なジャズの種が育つ土壤が戦前の新潟にあったことを教えてもららう。

ジャズには、昭和から平成までの百年近くの新潟の庶民生活が記録されていた。新しい時代を迎えて新潟ジャズストリートが続くかぎり、またジャズという芸術があるかぎり、物語の記憶は色褪せないだろう。この七月十三日・十四日、三十四回目のジャズストリートが開催される。こんどは新潟の昔を思いだしながら、ゆっくりジャズに浸ろう。